

日韓民話文学の比較研究

— 「かにむかし」と 「**팔죽 할머니와 호랑이**」 —

A Study of Comparative Culture Research on Narrarive Reading
of Children

足立悦男
Etsuo ADACHI

李普銀
Boeun LEE

島根大学教育学部附属教育支援センター紀要第7号

平成20年9月

「教育臨床総合研究 7 2008研究」

日韓民話文学の比較研究

— 「かにむかし」と 「팔죽 할멈과 호랑이」 —

A study of comparative culture research on narrative reading of children

足立悦男*

李普銀**

Etsuo ADACHI

Boeun LEE

要旨

私はかつて、釜山教育大学との国際学術研究において、日韓の昔話の伝承に関する実態調査をしたことがある。¹⁾ その結果、昔話を伝統文化の回復、継承という視点からではなく、現代文化としての昔話という視点から見直していくことを提案した。今回の研究は、日韓の現代民話文学の比較研究である。児童文化の比較研究は、日韓相互の教育交流を支える不可欠の基礎分野である。本稿では、類似した昔話の民話文学をテキストとして、日韓児童文化の比較文化的研究に取り組んだ。取り上げた作品は、木下順二の作品『かにむかし』と、박윤규 (パク・ユンギュ) の作品『팔죽 할멈과 호랑이』(あずき粥ばあさんと虎) である。日韓の昔話の比較研究には多くの先行研究があるが、作家の創造した民話文学の比較研究は、まだ未開拓の分野である。木下順二は「夕鶴」で知られる日本を代表する作家であり、『かにむかし』はその代表作の一つである。パク・ユンギュは、1963年生まれの若手作家で、作品には「내 친구 타라」(私の友達はタラ)「호랑이 똥은 뜨거워」(虎のうんちは熱い)「팔죽 할멈과 호랑이」(あずき粥ばあさんと虎) などがある。本稿では、この二つのテキストについて比較文化的な観点から考察していく。「팔죽 할멈과 호랑이」の翻訳は李普銀が担当し(【資料編B】に収録)、テキストの比較分析は、足立・李の共同研究として行った。

〔キーワード〕

日本の昔話と民話 韓国の昔話と民話 比較文化

1. 『かにむかし』(木下順二)

『かにむかし』(木下順二・文 清水昆・絵 岩波書店 1976) は、戦後民話絵本の代表作として知られている。佐渡に伝わる昔話「さるかにばなし」(猿蟹合戦) をモチーフとして、現代の民話文学として創作された作品である。原昌によると、全国に流布している「さ

* 島根大学教育学部言語文化教育講座

** 島根大学大学院教育学研究科

るかにばなし」の昔話は、「善悪臭の強いもの」であり、当時、出版されていた「さるかにばなし」絵本の中には、猿に青い柿の実をおつけられ、蟹が怪我をしてしくしく泣いていると、蜂たちがやってきて、みんなで仇討ちに出かけるが、最後に臼の下敷になった猿があやまり、許してもらおうという絵本もあり、教訓型の作品が少なくなかった。しかし、原昌は「木下順二の『かにむかし』」には、教訓型絵本からの脱皮があったことは言うまでもない。そして現代的視点から民話を再創造している点で注目すべきであろう。いいかえれば木下順二は、民話の核心が民衆の心であり、現代的視点からこの核心に迫ったとも言える。この絵本から強く訴えてくる『民衆のエネルギー』は、まさに現代に通ずる力をもっている。現代的視点からの民衆の集団的エネルギーの発掘が、戦前からの長い教訓の歴史をもった『猿蟹合戦』を葬ったわけである²⁾と、高く評価している。

「さるかにばなし」（猿蟹合戦）は五大昔話の一つとして知られる日本の代表的な昔話であった。木下順二が『かにむかし』の参考にしたといわれる佐渡の昔話「蟹ムカシ」（鈴木棠三採集『佐渡の島昔話集』）は、以下のような内容である。

「とんと昔があったとき。」で始まり、蟹が登場する。蟹は浜辺で拾った柿の種を植えると、たくさんの実がなった。そこに意地悪な猿がやってきて、柿の木に登れない蟹に代わって木に登り、柿を食べ始め、蟹に向かって柿の実を投げつけ、蟹をつぶしてしまった。すると、蟹の腹の中から子蟹たちが這い出てきた。子蟹たちは大きくなると、黍団子を作り腰に巻いて「猿の広場（ばんば）」に「仇討ち」の旅に出かける。途中で黍団子をもらった栗、蜂、石（藁打石）、股ン棒、小刀、牛の糞が「お供」になり、「猿のばんば（広場）」に攻め入り、で力を合わせて猿に仇討ちをする。「それで親の敵を討つたときあ」と締めくくられている。

この昔話は戦前から多くの絵本になって出版されていた。親の敵を討つという、封建的なモラルを主題とした昔話である。原昌は先の文献で、当時の「さるかにばなし」の絵本を「教訓型絵本」と批判し、木下順二『かにむかし』は「現代的視点から民話を再創造した」作品として高く評価していた。「現代的視点」とは「民衆の集団的エネルギーの発掘」であった、という。原昌の論文は1977年の執筆であり、当時の日本の文化的潮流がうかがえる。日本の国を動かす「民衆のエネルギー」に、大きな期待感をもてた時代であった。そして、児童文化としての民話文学もまた、そのような役割を担わされていたことがわかる。

しかし、『かにむかし』は、それから30年を経た現代においても、児童文化として全く古びていない。『かにむかし』は現代においても、すぐれた民話文学として評価できる。それは、時代の要請する役割とは違う、時代をこえた、もっと普遍的な文化的価値を内在しているからではないか。本研究で明らかにしてみたい仮説である。

私たちは、『かにむかし』の魅力を、昔話「さるかにばなし」の伝承をふまえながら、その独特の人物造形と、スリリングなストーリー性と、そして何よりも民話文学としての文体の創造にあった、と考えている。『かにむかし』は、語り手が直接語っているような文体効果によって、「語り」の世界へ読者を引き込んでしまうのである。

木下順二自身は、民話の「語り口」（語りの文体）について、次のように述べている。³⁾

本来口から耳へ語られるものであった民話のおもしろさの非常に大きな部分が、文字に書きしるされた場合にも、その「語り口」の中にあるということはいえるだろう。語り口というのは、文章でいうなら「文体」だが、ここで文体という場合、単に表現技巧というようなことよりも少し複雑な内容をいうのである。はなしの好きな老婆が民話を語るありさまを思い浮かべてみるといい。(中略) — こういうことの全体が、たぶんあの「語り口」のおもしろさというものをつくりだしているのであって、そして婆さんの顔つきよりはだいぶそっけない文字というものの羅列の中から、つまり文章の中から、「語り口」の場合にはああいうものであったところの中身を、文章というものの可能性の中に移しかえて、可能なかぎり読者の前に浮かびあがらせようという操作、それが民話の場合の「文体」というものだといってよさそうである。

『かにむかし』は、ここでいう「語り」の文体を創造した作品であった。昔話のストーリーの大筋は変えないで、現代語の「語り」にするために、表現方法に多くの工夫を試みたのであった。松谷みよ子は、民話において大事なものは「祖先から語り継がれた語り口を最大限に生かしながら、その作家独特のリズムを持ち、文学的にも密度が高いものでなければならない」⁴⁾と述べている。木下の『かにむかし』もまた、後でみていくように「作家独特のリズムを持ち、文学的にも密度が高いもの」であった。

2. 『팔죽 할멈과 호랑이 (あずき粥ばあさんと虎)』 (박윤규·글 박·윤ギュ文)

『팔죽 할멈과 호랑이』(あずき粥ばあさんと虎)(パク・ユンギュ文 ベク・ヒナ絵 시공주니어 2006)は、虎退治の昔話をもとに創作された現代の民話絵本である。韓国では虎退治の絵本は何度も出版されてきたが、この絵本はもっとも新しい作品である。新しい作品であるだけでなく、文と絵(韓紙)に工夫がみられ、すぐれた民話文学に仕上がっている。『かにむかし』の比較テキストにこの作品を選んだ理由である。

崔仁鶴によると、この昔話(옛날이야기イエンナル・イヤキ)の伝播については孫晋泰の研究によって「牛糞に倒れた虎」タイプの昔話であり、北方民族から韓国へ伝播したとされている。また、崔氏の作成した日韓昔話対照表によると、日本の「猿蟹合戦」と類似した韓国昔話として、「意地悪な虎の退治」という昔話が挙げられている。⁵⁾ その梗概は、以下の通りである。

1. 婆が虎の退治を計画。(1) 意地悪い虎が常に婆の大根畑を荒らすので、ある日ごちそうをするからといって虎を招く。(2) 虎がくる前に婆はすべてを準備しておいた。
2. 協力者たちによって虎を退治。(1) 訪ねてきた虎は火を起こすため火鉢を吹くと灰が目の中に入った。(2) 水桶の水で目を洗うと水に混ぜてあった唐辛子が目に入った。(3) 拭布でふくとついていた針が虎の目を刺した、(4) このときだまされたことに気づき虎は逃げようとしたが、牛糞ですべり庭に倒れた。(5) むしろがきて虎をくるくる巻くと背負子が虎をかついで深い海の中へ捨ててしまった。

この話は韓国では多くの人によって採録されていて、主人公や脇役、退治の仕方には多少の相違があるが、上の梗概のようにある程度パターン化している。この韓国の昔話は、「おばあさんと虎退治」（松谷みよ子・瀬川拓男編『朝鮮の民話』1973）、『チゲとむしろとおばあさんのとらたいじ』（小沢清子・文 譚小勇・絵 2000）として、すでに日本で翻訳された作品もある。

崔仁鶴は、『あずき粥ばあさんと虎』の「あとがき」で、「動物たちが登場する昔話を見ると動物に対する人々の考え方が変わりつつあったことが分かるが、この『あずき粥ばあさんと虎』は動物が神様のように崇められた時期から次の段階に移る段階での話ではないか」と解説している。また、朴榮濬の研究グループは、古くから伝わる「とら退治法」（京畿道加平郡）という、次のような昔話を採集している。⁶⁾

むかしある村に、明（ミョン）という男が住んでいたが、虎が現れて田畑を荒らされ家畜を食い殺されて困っていた。そこで男は虎に会って、明日、美味しいあずき粥をご馳走したい、という。虎は喜んで森に帰り、翌日やってきた。男は火鉢に灰をいっぱい入れて土間に置いた。すぐ側には水のたらいを並べて、唐芥子の粉をたっぷり溶かした。それから、布切れに数百本の縫い針を刺しこんでかまどにかぶせておいた。台所の出入り口に牛糞をどっさりまきちらした。庭に大きなむしろを敷き、むしろの向こう端にチゲ（背負子）をおいた。そこで明さんは、そこに現れた虎を騙して、チゲ（背負子）に入れて、虎をむしろごと川に投げ込んでしまう。

登場するのは、男、虎、灰、唐芥子、縫い針、牛糞、むしろ、チゲである。先の話の「婆」と「明という男」が違うだけで、策略を使って虎を退治することも同じ、登場する人物も同じである。韓国ではこのような話が、おそらく虎の棲んでいた時代から伝承されてきたものと思われる。『あずき粥ばあさんと虎』は、このような虎退治の昔話をふまえた作品であるが、その違いは少なくない。

「意地悪な虎の退治」や「とら退治法」などの昔話は、虎に田畑を荒らされ困っていた人間（婆、男）が、策を弄して虎を騙して退治する、という話である。しかし、『あずき粥ばあさんと虎』はそのような作品ではない。主人公は「婆」であるが、全く無力な存在である。虎が襲ってこようとすると、「アイゴアイゴどうしよう」と泣くばかりである。ここで獐猛で強い虎と無力な婆の人物像が対比されている。そして、「ばあさま、ばあさま、なぜ泣いとるん？」と、婆を気遣って人物が登場する。また、昔話では、人間（婆、男）は策を弄して虎を負かし、灰、唐芥子などは策略の道具にしかすぎない。しかし、『あずき粥ばあさんと虎』の登場人物は、無力なおばあさんを助けてくれる、個性をもった人物として登場する。昔話では、主人公一人で知恵をしぼって虎を懲らしめるが、『あずき粥ばあさんと虎』では、おばあさんの泣き声を聞いて集まり、あずき粥一碗をよそってもらい、みんなが力を合わせて無力なおばあさんを助ける。おばあさんは貧乏であるが、心優しく、自分のできること（美味しいあずき粥を炊くこと）でみんなを助ける姿がじんと胸にこたえてくる。

このようにみえてくると、この作品は単なる虎退治の話ではない。無力な者同士が助け合い、自分のできる役割を果たすことで共通の思いを実現する、という共生のテーマをもった現代文学に昇華していることが分かる。

ここで、先にみてきた「意地悪な虎」「とら退治法」の昔話と、『あずき粥ばあさんと虎』の登場人物を一覧表にしてみると、以下のようである。

[登場人物一覧]

登場人物	意地悪な虎の退治 (昔話)	とら退治法 (昔話)	あずき粥ばあさんと虎 (現代民話)
虎	○	○	○
おばあさん	○	(明という男)	○
灰	○	○	(栗)
唐がらし	○	○	(スッポン)
牛の糞	○	○	○
錐(きり)	○(針)	○	○
むしろ	○	○	○
しょいこ	○	○	○
石臼	×	×	○
擬人化	×	×	○

この表から、この昔話にはある類型のあることがわかる。あずき粥ばあさんを守り、虎と闘う登場人物の類型である。灰、唐辛子、牛の糞、錐、むしろ、しょいこは多くの話に共通しているが、『あずき粥ばあさんと虎』では、灰、唐辛子に代わって、栗の実、スッポン、そして石臼が登場している。これらの人物は、栗の実はパーンとはじけて虎の目に当たり、スッポンは鼻に食らい突き、石臼は上からドシーンと落ちてきて、虎を追いつめる山場の場面を大いにもり上げていく。灰や唐辛子は地味であるが、これらの人物は活動的に活躍する。虎を追いつめる場面で、子どもたちの胸をわくわくさせる人物の仕掛けといえる。

また、『あずき粥ばあさんと虎』では、虎を懲らしめる「協力者」の役割が大きい。すべての「協力者」が擬人化されているからである。先にみてきた「意地悪な虎の退治」や「とら退治法」では、「おばあさん」や「明という男」が知恵を使って虎を退治する。そこでは、灰、唐辛子、牛の糞などは人間によって使われる「モノ(物)」でしかない。しかし、『あずき粥ばあさんと虎』ではそうではなく、擬人化されて一人一人重要な人物として登場している。ここにも現代の民話文学としての工夫があったと思われる。

3. 主題の比較

次に、2つの作品の主題について比較分析してみたい。以下の表は、両作品の主題に関する場面の比較対照である。登場人物が出会い、行動を起こす「きっかけ」になる場面の比較表である。

かにむかし	あずき粥ばあさんと虎
「かにどん かにどん、どこへゆく」	「할멈, 할멈, 팔죽 할멈, 똥 똥에 우는 거유?」 「ばあさま、ばあさま、あずきがゆばあさま、なぜ泣いてるん?」

「さるのばんばへ あだうちに」	「이 팔죽 먹고 나면 호랑이가 꿀떡 잡아먹는다니, 예구예구 어찌할꼬」 「このパッチュクを全部食べると、虎がゴックリとおらを食っちゃうなんて、アイゴーアイゴーどうしよう。」
「こしに つけとるのは、そら なんだ」 「にっぽんいちの きびだんご」	
「いっちょ くだはり、 なかま に なるう」	「맛난 팔죽 나 한 그릇 주면 못 잡아먹게 해 주지」
	「美味しいパッチュク一碗くれたら、食われんようにしてあげる。」
「 なかま に なるなら、やろうたい」	

木下順二の『かにむかし』から検討していく。この作品の主題を考える上で、上の表から「なかま」ということばに注目してみたい。『かにむかし』では、「きびだんご」をめぐって、「いっちょ くだはり、なかまに なるう」「なかまに なるなら、やろうたい」という対話がかくりかえされる。この話で繰り返し出てくるフレーズであるが、とくに「なかま」というキーワードは重要である。登場人物は、この物語以前にはバラバラの存在であった。それが、「きびだんご」を通して、「さるのばんばへ あだうちに」という思いを共有し、「なかま」になっていく。ここに、『かにむかし』のもう一つの主題があると思われる。

佐渡の昔話には、「一つ下せエお供ませう」と、「お供」という語が用いられている。「お供」とは「つき従って行くこと。また、その人」(広辞苑)という意味であり、そこには上下の関係がある。一方、「なかま(仲間)」という語は「ともに事をする人。同じ仕事をする人。また、その集まり。同類」(広辞苑)であり、上下の関係ではなく、親密感のより深い間柄である。『かにむかし』に登場するのは昔の農村ではどこでもみられたモノである。しかし、普段は全く別々の場所にあって、関連性のないモノたちである。その別々の場所にいたモノが、黍団子によって結びつき、目的に向かって力を合わせる。そういう仲間作りの物語でもある。

結末の場面では、「みんな じぶんじぶんで」「それぞれ おうたところに しずまりかえって」「うんと きばって まっておると」、猿が帰ってくる。それぞれの人物の個性にあった持ち場についている。誰かに指示されて持ち場につくのではなくて、それぞれ、みずからを生かす持ち場を見つけて、猿を迎え撃つ。ここにも登場人物相互の強い「なかま」意識が描かれている。その意味で、社会生活を営む上での、個人と集団の理想的な関係が描かれているといえる。現代の教育や地域社会から失われつつある価値観である。

『かにむかし』が現代の子どもたちにも共感できるのは、そのような現代的な主題があるからだと思われる。そう考えると、木下の作品は、「猿蟹合戦」の主題である「仇討ち」だけではないことが分かる。「さるのばんばへ、あだうちに」というセリフもくりされているが、「いっちょ くだはり、なかまに なるう」「なかまに なるなら、やろうたい」という対話もくりかえされている。そのことで、単なる「仇討ち」の話ではないことが強調されている。この作品が「仇討ち」という封建思想を免れているのは、そのためではないかと思わ

れる。

では、韓国の『あずき粥ばあさんと虎』の主題は、どうであろうか。『あずき粥ばあさんと虎』には、あずき粥でやりとりをする問答部分をみると、『かにむかし』にみられた「なかま」（仲間）という言葉は出てこない。しかし、同じような「なかま」意識はテーマの一つになっている。昔話の虎退治は、策略をもって虎を騙す話であった。しかしこの作品は、そうではない。「あずき粥ばあさんの泣き声が家中に響いた」から、それを聞きつけたモノたちが心配して登場してくる。「なぜ泣いとるん？」と聞き、事情を知ったあとで、「食われんようにしてあげる」と、みずから加勢にのりだしてくる。それから、「栗はズルズルと啜りきってから、かまどの灰の中にすつともぐりこんだ」。ここでも、誰かに指示されたのではなく、みずからの意思で、みずからの持ち場を決めている。あとの登場人物も、あずき粥ばあさんと同じようなやりとりをしながら、みずからの持ち場についていく。ここには、あずき粥ばあさんとの「なかま」意識と、人物同士の「なかま」意識がみてとれる。無力なあずき粥ばあさんを、「なかま」みんなの力で救う、というテーマがそこにはある。この作品が現代の民話文学となった所以である。

『あずき粥ばあさんと虎』のばあさんは、「ホランア、ホランア」とやさしく呼びかけ、「雪降る冬になると、お前も食いもんがなくなるに、美味しいパッチュクでも腹いっぱい食ってから、ゴックリとおらを食ってもええじゃないか？」と語りかけている。ここには古い昔話のような策略で騙そうとする気持ちは微塵もない。自分の命を惜しむより、食べ物がなくなって困っている虎を心配している。そして、パッチュクを約束して、それから自分を殺すことを勧める。あずき粥ばあさんの虎を思う純粹なきもちがうかがえる。あずき粥ばあさんは単に無力なだけではなく、虎の身を案ずる慈悲の心をもっている。『かにむかし』の子蟹たちにはない、この作品の人物造形の特徴である。題名の「あずき粥ばあさんと虎」の「と」には、単なる虎退治の話ではなく、虎に対する思いやりも表現されていて、ここには仏教的な東洋思想をみることもできる。

また、民話文学には民俗的な意味も賦与されていることが多い。『かにむかし』の黍（黍団子）は、この作品では、パワーアップする呪術的な意味と、「いっちょ くだはり、なかまになろう」と「なかま」に結びつける役割を果たしている。日本の代表的な昔話『桃太郎』でも、「日本一の黍団子」は同じような役割を果たしている。『あずき粥ばあさんと虎』では、「あずき粥」が同様の意味を賦与されている。この作品の虎退治は冬至の日に実行される。鄭玄実によると、韓国には冬至の日にあずきを炊く習わしがあり、あずきの赤い色が悪魔を追い払うと信じられているからだという。⁷⁾ 黍団子やあずき粥は、そのような民間信仰の意味合いも含まれている。現代の民話文学においても伝承すべき重要な要素といえる。

4. 登場人物の比較

次に、登場人物を比較する。『かにむかし』には、「猿、蟹、子蟹、栗、蜂、牛の糞、はぜ棒、石臼」。『あずき粥ばあさんと虎』には、「虎、おばあさん、栗、スッポン、牛の糞、錐、石臼、わらむしろ（藁蓆）、しょいこ（背負子）」が登場する。両作品に出てくる共通のキャラクターもあるが、日韓に独自のキャラクターもある。その共通性と相違性によって、この

二つの作品は日韓共通の比較文化のすぐれたテキストになっている。

まず、猿と虎という重要人物の違いがある。猿と虎は日韓の昔話に特有のキャラクターであり、日韓の子どもたちにキャラクターを通してお互いの物語に興味・関心を持たせることが可能である。赤祖父哲二によると、日本の「さる」は、民俗的には聖俗の両義性をもっているという。⁸⁾ この説をふまえると、昔話に多く登場する猿は、俗的な性格のものが多い。『かにむかし』の猿もそうである。ちなみに中国では「猿」は恐ろしい野生の獣、「猴」は愛すべきヒーローと考えられている、という。

虎は韓国の昔話の代表的なキャラクターである。崔仁鶴の調査によると、虎は動物昔話の中で一番多く登場する。⁹⁾ 虎は動物昔話のみならず、韓国の昔話では欠かせない存在である。齋木恭子は、韓国の昔話の虎について「虎が権力者の代わりとして、あるいは民間信仰の対象として、しばしば登場するのも韓国昔話の特徴です。たとえどんなに恐ろしい虎でも、最後におばあさんや子どもなど力の弱い者に退治される話は少なくありません。これは、民衆が、自分たちを苦しめる悪い権力者や外敵に見立てて、痛烈な批判と抵抗の姿勢を語り伝えてきたのに他ならないからです」と述べている。¹⁰⁾ この民話の登場人物たちもそういう役割を担っている。「権力者」「外敵」としての虎が「力の弱い者に退治される話」だからである。

山本美千枝の調査によると、韓国の昔話に出てくる虎は孫東仁によって獠猛型、情義型、愚直型、中性型、報恩型、変身型、反恩型に分類されていて、山本は韓国の昔話絵本をこの分類法によって調査し、韓国の昔話絵本の虎には「愚直型」が多い、という。¹¹⁾ そして、その理由を「韓国の昔話にはほとんどの話に教訓が含まれる。獠猛な虎を、かわいい兎や人間がやっつけてしまう。権力のある虎を、弱者が知恵と勇気で打ち負かしてしまうのである。だから知恵や勇気を持つことは大切なのだよと、子どもたちに教えたかったからではないだろうか」と述べている。この指摘は『あずき粥ばあさんと虎』にも当てはまる。この作品の虎は「あずき粥ばあさんをゴックリと食っちゃおう！」と獠猛ではあるが、おばあさんに諭されて森に帰るところや、身の危険を全く予知していないところには、どこか愚直な一面もある。獠猛でありながら、どこか愚直で憎めないところもある。韓国昔話の虎が時代を超えて人々に愛されてきた所以であると思われる。

『かにむかし』は「さるのばんば」へ「あだうち」に「行く」(攻める)物語であるが、『あずき粥ばあさんと虎』は、おばあさんの家で、獠猛な虎を「待つ」(待ち受ける)物語である。そして、主役の蟹と猿の力関係は対等であるが、主役のおばあさんと虎の力関係は比較にならない。また、子蟹たちは闘いに参加するが、おばあさんは全く無力であり闘いに参加しない。だからこそ、たくさんの援助者が必要であった。彼らは無力な者ばかりの集団であり、普段ならとても虎に抵抗できるような集団ではない。そのような無力な者たちの力で獠猛な虎を退治できたことに、この物語のおもしろさがある。

結末に注目してみると、『かにむかし』は石臼で終わるが、『あずき粥ばあさんと虎』では「わらむしろ」と「しよいこ」が加わり虎を追いつめていく。前者では「おおきな 石うすが、どしーんと おちてきて、さるは ひらとう へしゃげてしもうた そうな」と石臼で終わるが、後者では石臼のあと、「わらむしろ」「しよいこ」が加わり、虎をくるみ、高い崖

から川に投げ捨てる。この「わらむしろ」と「しょいこ」は、包む、背負うという本来の役割を果たすことで、物語の結末を大いに盛り上げている。

石臼、わらむしろ（藁藁）、しょいこ（背負子）は、農村には欠かせないものであったが、時代の変化とともにその存在は忘れられつつある。民話絵本には、そのような農村の大事な民俗文化を現代に継承していく、という役割もある。民話絵本は、文と絵によって、昔の民俗文化の匂い、情趣を子どもたちにそのまま伝えることができる。韓国の民話に登場する「わらむしろ」と「しょいこ」は、虎退治のけりをつけるときに大活躍する。農村では脇役のような存在がそこでは重要な役割を演じている。民話文学に特徴的な役割である。

このようにみえてくると、日韓の二つの民話は、現代文学としての現代的なテーマを共有している。単に仇討ちや虎退治という昔話の伝承ではなく、登場する一人一人の人物たちが、どのようにしてアイデンティティを獲得していくか、という物語でもある。この二つの民話にはいろいろな人物が登場しているが、誰一人欠けても物語は成立しない。すべての人物が相互にかけがえのない役割を認め合って、それぞれのアイデンティティを獲得していくところに、現代の民話文学としての共通の特徴がある。

5. 表現の比較

(1) リズムと語り口

まず、『かにむかし』で注目すべきは、独特の「語り」のリズムと、方言的文体である。浜辺で拾った柿の種を、庭のすみにまくとき、かには「はよう 芽を だせ かきのたね、ださんと、はさみで、ほじりだすぞ」と言う。日本語の七・五調のリズムである。また、黍団子をめぐりやりとりの場面では、「かにどん かにどん、どこへゆく／さるのばんばへ あだうち」に「こしに つけとるのは、そらなんだ／につぼんいちの きびだんご」と、やはり七・五調のリズムを基調としている。『かにむかし』の会話では、このような七音・五調の日本語古来のリズムによって物語が進展していく。そのために、作品を音読すると流れるようなリズム感が生まれる。このようなリズム感のある文体は、「さるのばんば」に「あだうち」に向かう人物たちの昂揚感をかきたてるのに効果的である。

『あずき粥ばあさんと虎』の中では3・4調、あるいは4・4調のリズムが見られる。韓国にも日本の和歌のように、高麗末から発達した韓国固有の定型詩である時調（시조）という詩があった。時調にはいくつかの種類があるが、もっとも基本的で代表的な形式は平時調（평시조）である。¹²⁾ 平時調は3章6句総字数45内外から成るという厳格な形式があって、音数律は3・4調、あるいは4・4調が基本であった。おばあさんの泣き声を聞いてやってきたモノたちが「할멈 할멈／팔죽할멈／똥 땀에／우는거유」と、そのわけを聞く場面が繰り返してでてくるが、このリズムに違和感を感じる韓国人はいないだろう。韓国では時調で使われた音律を昔話の台詞の中に使用していることは昔は見られなかった特徴である。日本の『かにむかし』と共通しているため、日韓民話文学の比較研究として注目すべきところだと思う。そして両国の固有のリズムをどのように翻訳して子どもたちに読み聞かせるかは、翻訳上での大きな研究課題である。

(2) 方言的文体

『かにむかし』の文体は、木下順二の作り出した方言的文体である。たとえば、「ほじりだすぞ」「つまみきるぞ」「ぶったぎるぞ」「もぎりきるぞ」や、「(ほじりだされては かなわん)、とおもうたかして」「(芽を) だしたそうな」などの文末表現は、昔話の口調を生かした木下独特の方言調の文体である。『かにむかし』にはセリフの中だけではなく、語り口にも方言が見られる。例えば「おもうて、ひろうて、というておったら」などである。

『あずき粥ばあさんと虎』には、『かにむかし』のような方言調の文体は、翻訳して分かったのであるが、一カ所しかみられない。「뭣 땀에 우는 거유?」は「なんで泣いとるん?」の意味であり、거유は全羅道地方の方言である。ちなみに全羅道地方の方言は多くの韓国人に親近感のある言葉だと思われる。この一カ所以外は全てが標準語で語られている。これは日本の民話との大きな相違点である。韓国では昔話であっても、このように標準語(표준어)で書かれているのが一般的である。そのために、『あずき粥ばあさんと虎』では、昔話をもとにした民話文学にもかかわらず、木下の作品のような「語り口」が少なく、昔話らしい印象は弱くなっている。『かにむかし』において木下順二が工夫したような方言的文体の研究は、韓国の民話文学においては、これから取り組むべき課題であると思われる。

(3) オノマトペの効果

オノマトペは擬音語や擬態語の総称である。文学作品において、特に子ども向けの本にはオノマトペが多く使用されている。読者のイメージを膨らませるのに適した表現だからである。木下民話には、そのオノマトペが多く使われている。

・つぶれた かにの こうらの 下から、かにの 子どもが ずぐずぐ、ずぐずぐと たくさんに はい出してきたそう。

・おおぜいの 子がにどもが うちそろうて、がしゃがしゃ、がしゃがしゃ、がしゃがしゃ あるいて行くと、まず ばんばんぐりに 行きおうた。

・そこで ますます 大さわぎに なって、がしゃがしゃ、がしゃがしゃ、ころころ、ぶんぶん、ぺたりぺたり、とんとん、ごろりごろりという さわぎになって、みんなは やっとさるのばんばに 行きついた。

その場に居合わせたような、登場人物の発する音が聞こえてきそうなくらいリアルな日本語表現である。『かにむかし』に使われているオノマトペは、目は文字を追っていても、あたかもすぐれた語り手の「語り」を肉声で聞いているような臨場感を感じさせる。特に最初の蟹の子どもたちがはい出してくるときの「ずぐずぐ ずぐずぐと」は木下の造語であり(『蟹ムカシ』では「蟹の子供がグズグズと這い出たとき」、無数の子蟹が生まれ出たことを表している。そのあと子蟹たちは「うちそろうて、がしゃがしゃ、がしゃがしゃ」と勇ましく行進していく。「がしゃがしゃ がしゃがしゃ」は、これから何か起こりそうな、子蟹らが何かやっしまいそうな雰囲気醸しだし、読者の期待感を高めていく。また、登場人物

の行進の様子はそれぞれ、ころころ（ばんばんぐり）、ぶんぶん（はち）、べたりべたり（牛のふん）、とんとん（はぜ棒）、ごろりごろり（石うす）と表現されている。二つとして同じオノマトペはない。彼らは一人一人、個性的な、かけがえのない人格を与えられていることは、オノマトペ表現からもわかる。

一方、『あずき粥ばあさんと虎』では、「かにむかし」以上に、多くのオノマトペが使用されている。例えば、おばあさんが泣いている場面では「**울쩍울쩍**：フルチョッフフルチョッフ」（しくしく）、栗がやってくる場面では「**떼굴떼굴**：テグルテグル」（ころころ）など。日本語や韓国語のオノマトペは、音やものの様子を表す民族に独自の比喩表現なので、今後、翻訳においてどう表現するか、という課題がある。

本稿の『あずき粥ばあさんと虎』の翻訳では、「パッチュク」（粥）、「ハルモム」（おばあさん）、「ホランイ」（虎）、「エグエグ」（アイゴーアイゴー）などの、繰り返されるキーワードはできるだけハングルの音読みを生かしてみた（【資料編B】を参照）。「読み聞かせ」において、こういった韓国語の音声は、耳を通しての異文化体験として重要ではないかと考えている。これからの国際理解教育では、「ことば」という文化を通じて、相互の異文化の感覚的体験を重視したい。

（4）絵と韓紙

絵本の絵は、それ自体に文化的メッセージが表現されている。文だけでは表せない、文化の特徴をリアルに表現できるからである。清水崑の絵や **백희나**（ペク・ヒナ）の絵は、その点でたいへんすぐれた作品である。

『かにむかし』がすぐれた作品になったのは、清水崑の絵の効果も大きい（【資料編A】を参照）。原昌は「清水崑の絵も、民話の素朴な世界にマッチし、日本特有の毛筆と墨を用いてばかり、柿・さる・かになど淡い赤が基調となっていて、画面を暖かくしている。それに残酷に描かれず、むしろユーモラスに描かれており、おおらかな民話的雰囲気をかもし出している」¹³⁾と評価している。

一方、『あずき粥ばあさんと虎』のペク・ヒナの作品は、絵ではなくて、韓紙で作られた人形を使い、背景は水墨で描かれている（【資料編C】を参照）。この作品は、韓国人の情緒に合い、韓国的な雰囲気、そしてそこに漂う民話ふうの情趣は読者を魅了する、と評価されている。あずき粥一碗を手に持って、一つしか残っていない歯を見せながら微笑むばあさんの姿は本当に心よさそうに見える。ペク・ヒナの作品は、韓国の民族的文化を現代芸術として表現している。

結末のクライマックスの画面を比較してみよう。『かにむかし』では、「きゃあっ」（猿の叫び声）とか「どしーん」（石臼）を大きな太字で表している。『あずき粥ばあさんと虎』では、一頁を二枚の絵に区切り虎退治の闘いを盛り上げている。たとえば、かまどの前に暖まりにきた虎の絵と、栗がはじけて虎の目を襲う絵を左右に並べ、人物の活躍を際立たせている。また、虎が悲鳴をあげる場面では字を大きくして視覚的な効果を生み出している。

中川正文は、絵本は絵だけでも文章だけでもない、「絵+文章」によって、もう一つの世界を描きあげるものである、と述べている。¹⁴⁾ 子どもたちが絵を見ながら文を読んでもらう「読み聞かせ」は、大人の媒介者によって絵と文の物語世界を共有する文化体験である。

日韓の絵本の絵には、日韓の文化の違いが表現されている。児童文化の中でも絵本による「読み聞かせ」には、相互の異文化理解に果たす独自の役割があると思われる。

6. 研究の展望

以上、日韓の類似したモチーフの『かにむかし』と『팔죽 할머니과 호랑이』について、比較文化の観点から、テキストの比較分析を行ってきた。崔仁鶴は、「韓国と日本の昔話が一致したものが多いということは、言うまでもなく、両民族が過去数千年を通じて、同一文化圏に生きており、風俗や文化の背景が類似しているからである」¹⁵⁾と述べている。とともに、今回の研究で明らかになったように、類似したモチーフの昔話であっても、そこには日韓に独自の文化的背景が認められる。今回の研究は、日韓の昔話の比較研究ではなく、昔話をモチーフとした類似のテキストを取り上げて、民話文学の比較研究の試みであった。日韓の現代児童文化としての民話絵本の比較研究であった。また、継続研究として、ここで取り上げた日韓のすぐれた民話文学を、日本と韓国の子どもたちに相互に「読み聞かせ」を実践し、子どもたちの受容反応の比較研究を行ってみたいと考えている。¹⁶⁾

<注>

- 1) 足立悦男「昔話に関する日韓の比較考察」『(共同研究) 日韓相互理解教育プログラムの開発研究 — 子ども文化の比較を通して』文部省(国際学術研究) 1999。
- 2) 原昌「かにむかし」日本児童文学者協会編『日本の絵本100選』(『日本児童文学別冊』)、ほるぷ、1977。
- 3) 木下順二「作者のことば」『わらしべ長者』岩波書店 1962。
- 4) 松谷みよ子「再話について」『民話の世界』講談社 1974。
- 5) 崔仁鶴『韓国昔話の研究』弘文堂 1976。
- 6) 朴榮濬編『韓国の民話と伝説 — 高麗編』韓国文化図書出版社 1975。
- 7) 鄭玄実『民話で知る韓国』日本放送出版協会 2006。
- 8) 赤祖父哲二編『日中英言語文化事典』マカミラン・ランゲージハウス 2000。
- 9) 注5と同じ。
- 10) 齋木恭子「日・韓子どもの文化」『韓国江原道と鳥取県』富士書店 1999。
- 11) 山本美千枝『日韓昔話絵本の比較と教材化の研究』(鳥根大学教育学研究科修士論文) 2004。
- 12) 『東亜のプライム韓日辞典 第一版』斗山東亜(두산동아)
- 13) 注2と同じ。
- 14) 中川正文『児童文学を学ぶ人のために』世界思想社 1977。
- 15) 崔仁鶴『韓日昔話の比較研究』三弥井書店 1995。
- 16) 足立悦男「物語受容の比較文化的研究 — 二つの「きつね」物語をテキストとして」『鳥根大学教育学部附属教育支援センター紀要』第4号 2007。

【資料編】

A. 『かにむかし』 (木下順二・文、清水 崑・絵)



B. 『팔죽 할멈과 호랑이 — あずき粥ばあさん (パッチュクハルモム) と虎 (ホランイ)』
(박윤규·글 李普銀·訳)

昔々、深い深い山奥にパッチュクハルモムが住んでおった。グラグラとパッチュクを美味しく煮るから、パッチュクハルモムだそうだ。

山の畑に、かげろうがチラチラと燃えてくる春の頃、パッチュクハルモムが、あずきの畑で草取りをしておった。すると、大きなホランイがノソノソとやってきて、

「ウォフーン、パッチュクハルモムをゴックリと食っちまおう！」

といったもんだから、パッチュクハルモムは、

「ホランア、ホランア、おらが死ぬのはかまわんが、雪降る冬になると、お前も食いもんがなくなるに、美味しいパッチュクでも腹いっぱい食ってから、ゴックリとおらを食ってもええじゃないか？」

「そりゃ、そうだ。ウォフーン。」

と、ホランイは森の中に戻っていった。

カンカンとした夏も過ぎ、八月の中秋も過ぎ、シンシンと雪が降り、山も野原も真っ白くおわれた冬至になった。パッチュクハルモムは大きなかまに、パッチュクをグラグラグラと煮ながら、オイオイと泣いた。

パッチュクハルモムの泣き声が家中に響いたら、栗が一つ コロコロ、ピョンピョンと、やってきて、

「ハルモム、ハルモム、パッチュクハルモム、なぜ泣いとるん？」

「このパッチュクを全部食べると、ホランイがゴックリとおらを食っちまうなんて、アイゴアイゴどうしよう。」

「美味しいパッチュク一椀くれたら、食われんようにしてあげる。」

ハルモムがシャキシャキと、パッチュク一椀をよそってあげたら、栗はズルズルと^{すす}啜りきっ

てから、かまどの灰の中にすつともぐりこんだ。

次に、スッポンが一匹 ノソノソ、ぺたぺたと、這ってきた。

「ハルモム、ハルモム、パッチュクハルモム、なぜ泣いとるん？」

「このパッチュクを全部食べると、ホランイがゴックリとおらを食っちまうなんて、アイゴーアイゴーどうしよう。」

「美味しいパッチュク一椀くれたら、食われんようにしてあげる。」

ハルモムがシャキシャキと、パッチュク一椀をよそってあげたら、スッポンはズルズルと啜りきってから、水桶の中にドボンと沈んだ。

次に、ウンチが ペタリペタリと、入ってきた。

「ハルモム、ハルモム、パッチュクハルモム、なぜ泣いとるん？」

「このパッチュクを全部食べると、ホランイがゴックリとおらを食っちまうなんて、アイゴーアイゴーどうしよう。」

「美味しいパッチュク一椀くれたら、食われんようにしてあげる。」

ハルモムがシャキシャキと、パッチュク一椀をよそってあげたら、ウンチはズルズルと啜りきってから、台所の床にペタッと横たわった。

その次に、錐が ピョンピョン、トントンと、跳んできた。

「ハルモム、ハルモム、パッチュクハルモム、なぜ泣いとるん？」

「このパッチュクを全部食べると、ホランイがゴックリとおらを食っちまうなんて、アイゴーアイゴーどうしよう。」

「美味しいパッチュク一椀くれたら、食われんようにしてあげる。」

ハルモムがシャキシャキと、パッチュク一椀をよそってあげたら、錐はズルズルと啜りきってから、ウンチの後ろにこっそりと隠れた。

またその次に、石臼が ゴロリゴロリ、ドスンドスン、歩いてきた。

「ハルモム、ハルモム、パッチュクハルモム、なぜ泣いとるん？」

「このパッチュクを全部食べると、ホランイがゴックリとおらを食っちまうなんて、アイゴーアイゴーどうしよう。」

「美味しいパッチュク一椀くれたら、食われんようにしてあげる。」

ハルモムがシャキシャキと、パッチュク一椀をよそってあげたら、石臼はズルズルと啜りきってから、台所の戸の上に隠れた。

あら、今度はわらむしろが、ゴロゴロと、転んできた。

「ハルモム、ハルモム、パッチュクハルモム、なぜ泣いとるん？」

「このパッチュクを全部食べると、ホランイがゴックリとおらを食っちまうなんて、アイゴーアイゴーどうしよう。」

「美味しいパッチュク一椀くれたら、食われんようにしてあげる。」

ハルモムがシャキシャキと、パッチュク一椀をよそってあげたら、わらむしろはズルズルと啜りきってから、台所の前にパラッと、広がった。

それから、背負子が、ピョンピョンと、走ってきた。

「ハルモム、ハルモム、パッチュクハルモム、なぜ泣いとるん？」

「このパッチュクを全部食べると、ホランイがゴックリとおらを食っちまうなんて、アイゴーアイゴーどうしよう。」

「美味しいパッチュク一椀くれたら、食われんようにしてあげる。」

ハルモムがシャキシャキと、パッチュク一椀をよそってあげたら、背負子はズルズルと啜りきってから、庭にある柿の木の横にスッと隠れた。

じゃ、次は誰が来るかなァ？ しまった！ あれは…。

